



社会福祉随想リレー

「人事交流研修」を通じて得たもの

はるにれの里生活介護事業所ほぬーる
学部58期 松川 真子

昨年10月1日から12月28日までの3か月間、私の職場である社会福祉法人はるにれの里と当別町にある社会福祉法人ゆうゆうとの間で人事交流研修を行いました。この研修は、お互いの法人が1名ずつ職員を交換し、お互いの職場で働くという初めての試みでした。このたび、その研修に私が参加しましたので、以下、研修についての報告をさせていただきます。

1. 社会福祉法人ゆうゆうについて

この法人は、2003年北海道医療大学のボランティアセンターとして設立したのが始まりで、2013年に社会福祉法人化しました。法人理念は「ひとりの想いを文化に」を掲げ、地域の過疎化が進む当別町を拠点に江別市、東京都の一部で社会福祉サービスを行なっています。社会福祉サービスに限らず幅広い事業を行っており、その中でも私が関心をもった取り組みについてご紹介します。

① 本格的な農作業

この法人では、担い手がいなくなった広大な敷地を持つ農園を引継ぎ、利用者と多くの作物を生産しています。自分たちが食べる分だけを生産しているわけではなく、出来上がった作物は東大の学食として提供されたり、近隣の農協や通販で販売されたりもしています。

一つの商品として生産し、地域の農園の活性化と共に社会に貢献していく取り組みは素晴らしいです。

② アート活動

ここでは、アート活動が盛んに行われており、厚生労働省「障害者芸術文化活動普及支援事業」の北海道・北東北ブロックの広域センターとしての役割も果たしています。そのため社会福祉法人には珍しく、学芸員として勤務している職員がいます。その人と話をする中で、支援とは別の視点で、芸術として利用者の作品と向き合う姿勢を感じ、「芸術を楽しむ」ことや「作品として展示する」ことなど、多くのことを教えてもらいました。

2. 研修内容と取り組み

研修では、グループホームでの勤務がメインで、夜勤、日勤、支援会議などに携わらせてもらいました。私が勤務したグループホーム(以下 GH)は地域の老朽化したアパートを1棟ごと改修した建物を使用しており、1階は男性棟、2階は女性棟として使われていました。ユニット型として使用している他、男性利用者の中には独居型として使用している人がいました。職員が同じ建物にいながらも独居生活が可能なのは、アパートという特性をうまく生かした作りだからではないでしょうか。また、ユニット型の各居室にも風呂、トイレが設置されており、プライバシーが確立されていました。

GH では、研修中の課題として、利用者が自立して物品管理ができるような支援に取り組みました。この利用者は自立度が高く買い物が好きな人なのですが、洗剤やシャンプーなどの消耗品を大量購入してしまい、物品管理が苦手という困り感を持っていました。そこで、その人との関わりから「適切なストック数と購入のタイミングがわからないのではないか」という仮説を立てました。そして、洗剤やシャンプーを印をつけた透明な容器に移し替え、印の所まで使ったら、購入するという仕組みを作りました。ここでは普段、はるにれの里で行っている視覚支援をうまく活用することができました。

仕組みを作った段階で研修が終了してしまったのですが、今では支援の狙い通りに自立して物品管理ができるようになった、と報告を受けてとても嬉しく思います。

GH の勤務以外の日は、生活介護事業所でも勤務をさせてもらいました。この生活介護事業所は地域の中学校の廃校舎をそのまま利用しており、ユニットの名前が「音楽室」や「校長室」などととてもユニークでした。作業活動として農作業に力を入れており、それぞれが得意を活かした作業に取り組んでいました。実際にナスの苗抜きの仕事を一緒にさせてもらいました。その後、ご褒美に利用者と一緒に食べたメロンはとても美味しかったです。

3. 研修から学んだこと

3か月間に渡る研修の中で地域の人と話をしたり、法人の人から事業の説明を聞いたりしながら、そこからたくさん学びを得ました。

まず、「地域にある資源として地域を支え、支えられている法人」ということです。

主に障害分野のサービスを行っているものの、少子高齢化で過疎な地域を支えるべく、高齢者のニーズにも対応できる仕組みができていました。また、畑仕事を地域のボランティアの人が手伝ったり、GH の宿直業務を北海道医療大の学生がアルバイトとして担ったりなど、

地域の人たちの力が大きく働いていました。

次に、「社会福祉のイメージを変えている」ということです。

ゆうゆうでは、中高生に対して積極的に社会福祉教育を行なっていました。

「社会福祉といえば介護だけで、きつい仕事」というイメージを払拭するべく、社会福祉の多様性やクリエイティブで楽しい一面を伝え、社会福祉に関心を持ってもらっていました。私も社会福祉関連の就活生に社会福祉の魅力を伝える機会がありますが、まだ社会福祉を知らない世代に対して話をするというのはとても有意義に感じました。

4. おわりに

研修では、ゆうゆうのみなさんをはじめ、当別町の人たちの暖かさに大変支えてもらいました。研修の話を受けた当初は、3か月間という期間に不安を覚えたこともありました。しかし、研修が開始すると毎日がとても楽しく、あっという間に終了してしまいました。自由に思いっきり研修ができたのも、受け入れてくれたゆうゆうのみなさんや、快く送り出してくれたぼぬーの職員のおかげだと思っています。

私の人生の中でも財産となる貴重な経験になりました。

また、改めて3年間働いてきて身につけていたことや、これからの支援員としての課題を再確認するよい機会ともなりました。

研修に携わってくれた全ての方々に感謝申し上げます。

社大とのリモート授業について

社会福祉法人「栄和会」

同窓会副会長（学部第2 3期） 瀬戸 雅嗣

コロナ過で昨年の就活フェアが中止となり、同窓会と大学のつながる機会が減ってしまったことは、みなさんご存じのことと思います。

こうした状況下にあって、北海道同窓会（以下、「道同窓会」）として、何か出来ることはないかと、本学同窓会や本学働きかけていました。

他方、本学では年度当初からリモート授業となり、特に社会福祉援助技術演習がどのように出来るのか、その方策を検討していました。

そこで倉持香苗先生から、「同窓会で施設訪問や実習に関するリモート授業に応じてくれる施設・事業所等がないか」という打診があり、同窓会では木村副会長と私の法人が手を挙げ、リモート授業を行いました。同窓会誌「原宿」に、木村副会長と私のコメントが載っていましたが、当法人で行った2回の授業についての報告をします。

* まずは2年生…

第1回目は、11月17日に2年生対象の「社会福祉援助技術実習倉持クラス」で、出席者は1

2人。2年生はこの時期、通常であれば各種の施設を訪問し実習先をイメージするとのことですが、しかし、コロナ過でこれが出来ないため、リモート授業で少しでも社会福祉現場の感覚を感じてもらおうということでの実施でした。2年生にとっては初めてのゲスト講義だったそうです。

今回授業を受け入れたのは、特別養護老人ホーム「あつべつ南5丁目」(石崎剛施設長)でした(余談ですが、石崎施設長と倉持先生は日本福祉大学の同期生とのこと。お互い最初は分からずにいたものの、授業終了後の打ち合わせで判明したらしいです。大きい大学は同期もすぐわからない場合があるんですね)。

授業は、事前に業務課久慈相談係長が特養あつべつ南5丁目での相談事例を提示し、前週の授業で学生がグループ討議しており、その討議結果を発表してもらい、それに久慈係長がコメント。その後特養あつべつ南5丁目の説明や相談員の役割、施設でのチームケアの現状などを説明しました。また、学生全員が老人福祉や相談員の業務に関する質問をして、それに久慈係長が答えて授業が終了しました。

* 続いて3年生…

第2回目は11月25日に、3年生対象の「社会福祉援助技術演習倉持ゼミ」で、出席者は12人。今回も特養あつべつ南5丁目、講師は石崎施設長。あつべつ南5丁目は令和元年開設ですが、特養建設まで約10年隣地にあるデイサービスセンターあつべつ南5丁目を拠点に地域とのつながりを作ってきました。

この開設にあたっては地域とのつながりを重要視しており、施設内に誰もが利用できるコミュニティカフェを開設して、地域拠点としての役割を担っています(残念ながら、昨年2月からコロナの影響でカフェは休業中です)。

授業はその休業中のカフェから行いました。石崎施設長から厚別区やこの地区の特徴の説明のあと、特養開設の経緯や特徴、地域との交流についてを説明しました。ゼミでは前期に多世代が利用することができる地域拠点の重要性についての理論を学んでおり、講義の途中で店内を映し出しながら授業を行ったことで、参加者全員が同じ空間を見て、地域拠点を理解することが出来たようでした。

ちなみに私は、両日とも最初と最後に一応卒業生としてあいさつだけしています。

* リモート授業を通じて…

同窓会と大学の連携については、さまざまな課題があります。しかし、とりあえず出来ることから初めてみました。学生から感想文が送られてきて、少しは役に立つことが出来て良かったのではないかと思います。

また今後、これらを総括し、同窓会と大学の連携の在り方、とりわけ学生への働きかけや協力について、積極的に道同窓会として取り組んでいかれたら良いと考えています。

道同窓会員のさらなるご協力をお願いします。

アガペへの感想、読者の声など

* 大橋謙策先生より…

いろいろご苦労様です。アガペ第 31 号、早速読ませていただきました。

北海道支部が大いに頑張っていることが分かり、嬉しい限りです。

① 菱沼先生の報告者も、日本社会事業大学の状況がよくわかり良かったです。

② 杉村先生の『生きるということ』(萌文社)は、とてもいい本です。市販はされていませんが、萌文社に申し込めば1500円で購入できます。是非読んでください。

皆さま、ご自愛の上、ご活躍下さい。

* 大内高雄氏(元北星大教授)より…

冠省 社大の卒業生でなく、関係者の一人として、標記広報をお届け下さり感謝します。大変な状況のなかで暮らしていますが、皆様のよきお働きをお祈りしております。

* 「アガペ」は年に4回の発行を予定しており、とりわけこのコロナ禍にあっては、同窓会と同窓会員を繋ぐ架け橋の一つと考えています。

送付先は、道内同窓会員のほか、社会福祉系大学の卒業生や社会福祉職場で働くみなさん、また社大関係者等です。この際、そうしたみなさんよりご感想等をいただいているため、今回より、それらを掲載することとしました。

また特に、道同窓会員のみなさんは、近況等の報告を事務局あてに送ってくださると有り難く思っています。何とぞよろしく願います。

第15期生「入学50周年記念のつどい」資料集を発行

学部第15期生は、1971年入学、1975年卒業のため、今年の4月で「入学50周年」を迎えました。

これを記念して、3月20日に、原宿にある東郷会館にて、記念の「つどい」を開催すべくこれまで準備を進めてきました。

しかし、コロナ禍により開催を断念し、その代わりに「記念資料集」を発行することとしました。

その内容は、校歌や社大節、同期生の近況報告、恩師たちからのメッセージ、在学当時の資料や写真、原宿周辺の写真等です。資料等の提供を同期生に依頼し、また近況等の「報告」もお願いしました。

これを元に、同窓会事務局(木村副会長=15期生、事務局の横山さん)のご協力を得て、予定通り3月中に無事発行することができました。

「資料集」は、道同窓会にも寄贈予定ですし、母校同窓会 HP にも掲載予定です。興味のある方は是非、ご覧ください。

現役学生に対する支援について(報告と依頼)

標記について、先の総会資料中でカンパ(募金)の依頼を道同窓生に行いました。

3月末日までの集計で、9人の同窓生より、76,000円のカンパがありました。

これについては、本学同窓会あてに送金し、本学とも協議してもらい、適切な形での有効活用を図ってもらえるように依頼しました。

また、本学同窓会に対しても、道同窓会としては、その時々状況に合わせた提案を行っており、今回も、「できれば全国的な規模での活動を展開してもらいたい」と要請してあります。

加えて、道同窓会としては、今後もカンパ活動を継続しますので、心ある方は道同窓会あて(下記参照)に資金送付をお願いします。

道同窓会年会費納入とカンパのお願い

「アガペ」発行をはじめとする道同窓会のささやかな活動は、同窓会員のみなさんの年会費で賄われています。

4月1日現在、100人以上の道同窓会員と関係者の皆様に、「アガペ」を始めとした様々な資料を提供しています。

道同窓会員のみなさんにおかれましては、それぞれの立場や職場等で、日本と北海道の社会福祉等の推進に邁進されていることと思います。道同窓会は建学の精神に則り、そうしたみなさんの活動を把握し、共有することで、さらに広い方々との結びつきを構築していければ良いと考えています。

つきましては、今年1月に送付した「総会資料」にあるとおり、以下の口座に、ATMより、年会費のご入金をよろしくお願いいたします。

なお年会費は、1年分(1~12月)で、2000円です。

また、上述のように、「現役学生へのカンパ」活動も継続していますので、年会費送付の際に、こちらへのご協力も何とぞよろしくお願いいたします。

* ゆうちょ銀行の北海道支部口座は……

★ 口座名…日本社会事業大学同窓会北海道支部

☆ 記 号…19000

★ 番 号…44245181